

首都オタワのカナダ・デーの特徴と新たな動向

大石太郎

1. はじめに

カナダは、北アメリカに形成された性格の異なるイギリス領諸植民地が1867年に連邦を結成して成立した自治領を基盤に発展した国家である。そうした経緯から、カナダは発足当初から地域的に多様であり、2つの言語を主要言語としてきた。また、従来から文化的・宗教的にも多様であったが、20世紀後半以降、移民政策の変化や多文化主義政策を背景に、文化的多様性はますます増しつつある。このように多様性を特徴とする国家において、国民的アイデンティティはどのように育まれるのであろうか。2017年にカナダが連邦結成150周年を迎えたことは、そうした問いを再検討する絶好の機会となった⁽¹⁾。その際に注目されるのが各種の祝日であり、とくに、連邦結成を祝うカナダ・デーはカナダのアイデンティティを考えるうえでもっとも重要な祝日である。

後述するように、カナダ・デーには各地でさまざまなイベントが開催され、とくに首都オタワの連邦議会議事堂前広場(以下、議事堂前広場)で開催されるヌーン・ショーは、政府要人が参加し、各地から招待されたアーティストがパフォーマンスを披露する一大イベントである。しかし、カナダ・デーが現在のように祝われるようになったのは比較的最近のことである。そもそもカナダ・デーという名称となったのも1982年のことであり、それまではドミニオン・デーという名称の祝日であった⁽²⁾。

カナダ・デーが学術的に検討されるようになったのも最近になってからであり、2010年前後になって活発化する。たとえば、連邦政府が継続的に祝賀行事を始めた1958年から連邦結成125周年となる1992年までのオタワにおけるカナダ・デーのイベントを検討したマシュー・ヘイデイ(Matthew Hayday)は、イベントにおいてカナダ全土に広がるフランス系カナダの存在が重要になっていったことを明らかにした⁽³⁾。ヘイデイはさらに、カナダ・デーのイベントが英国的伝統を重視したジョン・ディーフェンバカー(John Diefenbaker)時代の要素を残しつつ、政府の目指すカナダの理想的な姿を表象する場となっていることも指摘した⁽⁴⁾。

これらの研究によって、カナダが社会的・文化的に大きく変化した時代にどのような経緯を経て現代のカナダ・デーになったのかが明らかにされた。ただ、分析の対象は

1990年代前半までにとどまっております、その後の動向は詳らかにされていない。2010年代に入り、かつてオタワにおけるカナダ・デーのイベントのあり方に大きく影響したケベック州の主権獲得運動は急速に衰退し、カナダは新しい時代を迎えつつあるようにみえる。また、カナダ・デーのイベントには二言語主義や多文化主義といった政策を先取りしてきた側面がみられたことから⁽⁵⁾、カナダ・デーに注目する意義が見いだせる。そこで本稿では、2005年以降の現地観察⁽⁶⁾と主要紙の記事にもとづいて、首都オタワのカナダ・デーのイベントの特徴と新たな動向を検討する。

2. オタワにおけるカナダ・デーの祝賀行事

まず、カナダ政府ホームページ⁽⁷⁾とヘイデイ⁽⁸⁾の記述にもとづいて、カナダ・デーの歴史を簡単にふりかえっておこう。いうまでもなく、カナダ・デーは1867年7月1日の連邦結成を祝う日である。この日は1879年に祝日とされ、従来ドミニオン・デーとよばれてきた。ただし、当初はコミュニティレベルでピクニックなどが実施される程度で大きな行事が開催されることはなく、連邦結成50周年の1917年は第一次世界大戦の最中であったことから企画倒れとなり、60周年となる1927年に初めて連邦政府がかかわって各地で大規模なイベントが開催された⁽⁹⁾。その後、ディーフェンベーカー保守党政権下の1958年になって、連邦政府主催の祝賀行事がオタワの議事堂前広場で毎年開催されるようになった。

自由党への政権交代を経て、1967年の連邦結成100周年はエリザベス女王の臨席の下で大々的に祝われたが、1968年以降は財政難から予算が削減され、ついに1976年には連邦政府主催の行事が開催されなかった⁽¹⁰⁾。しかし、同年11月のケベック州におけるケベック党政権の成立によって状況は大きく変わり、翌1977年には400万ドルの予算を得てプロのアーティストを中心とする大イベントに変貌した。そして、1980年代後半にはオタワにおける祝賀行事はほぼ現在の形となった⁽¹¹⁾。すなわち、議事堂前広場を会場とし、政府要人が出席し儀礼的な要素を含むヌーン・ショーと、純粋な野外コンサートであるイブニング・ショーおよびそれに続く花火という二本立ての形式であり、これらはカナダ放送協会(CBC / SRC)によって全国に生中継される。なお、主催者は1984年から首都圏協議会(National Capital Commission)になっていたが、連邦結成150周年を見据えて2014年以降は責任官庁であるカナダ文化継承省(Canadian Heritage)に変更されている。

中心となるヌーン・ショーをより詳細に紹介しよう。ヌーン・ショーには通例、カナダ総督、カナダ連邦首相と責任大臣である文化継承省大臣(1996年以前は内務大臣 Secretary of State)が出席する。英国王室関係者が出席することもあり、近年では1990

年、1992年(連邦結成125周年)、1997年(連邦結成130周年)、2010年にエリザベス女王が出席した⁽¹²⁾。連邦結成150周年であった2017年にはチャールズ皇太子が出席し、2011年には結婚直後にカナダを訪問したケンブリッジ公(ウィリアム王子)夫妻が出席した(写真1)。これらのイベントの観客数は明らかではないが、新聞記事に掲載された数字を総合すると、1980年代以降、議事堂前広場は3千から3万程度、首都圏全会場では10万から30万程度と推定され、とくに王室関係者が出席する年は非常に多くの観客を集めている。

ヌーン・ショーは、招待された歌手によるカナダ国歌(O Canada)の独唱で始められることが多い。周知のとおり、カナダ国歌には英語とフランス語の歌詞があるが、このような国家的行事の場合には、最初のパートが英語、真ん中のパートがフランス語、最後のパートが英語で歌われるのが一般的である。王室関係者が臨席する際には英国国歌も歌われるが、スティーブン・ハーパー(Stephen Harper)政権後期にはロイヤル・アンセム(royal anthem)として王室関係者不在の際にも歌われ、ジャスティン・トルドー(Justin Trudeau)政権下の2018年も、王室関係者は不在であったが歌われた。国家独唱の後、司会進行役のタレントにバトンが渡される。2018年に司会を務めたのはマリエム(Marième, ケベック州)とリサ・チャーリーボーイ(Lisa Charleyboy, ブリティッシュコロンビア州)の女性2人組であった。従来はいずれも英語とフランス語の二言語話者である男女のペアが司会を務め、それぞれが両言語を駆使することが多かったが、2018年はもっぱら英語を話す役とフランス語を話す役とに分けられ、チャーリーボーイが前者、マリエムが後者であった。

国歌独唱に続いて、文化継承省大臣、首相、総督が演説するが、この順序はつねに同じではない。多くの場合、彼らは英語とフランス語の両方で演説し、厳密に計測したわけにはないが、3分の1から4分の1がフランス語に充てられ、英語とは別のことを話す⁽¹³⁾。そして、要人の演説の間にはカナダ各地から招待されたアーティストの演奏が披露される。2018年の例を示すと、アーケルズ(Arkells, オンタリオ州)、ライツ(Lights, オンタリオ州)、ブリジット・ボワジョリ(Brigitte Boisjoli, ケベック州)、イスクウェ(Iskwé, マニトバ州)、ジャン＝マルク・クチュール(Jean-Marc Couture, ニューブランズウィック州)、ローズ・カズンズ(Rose Cousins, プリンズエドワードアイランド州)、マルティナ・オーティズ・ルイス(Maritina Ortiz Luis, オンタリオ州)、クイーン・カ(Queen Ka, ケベック州)が出演した。各州から1組ずつ出演したかつてほどの完全さには及ばないが、音楽のジャンルに加え、地域や言語のバランスが慎重に考慮されていることがうかがわれる。一方、カナダ・デーはちょうど学校が夏休みに入る時期にあたり、中高生とおぼしき地元の若者たちの姿も多く、彼らがお目当てにしそうなアーティストも選ばれている。たとえば、2013年にはカーリー・レイ・ジェプセン(Carly Rae Jepsen, ブリティッシュコロンビア州)が出演して会場を沸かせた。

3. オタワのカナダ・デーの特徴

先行研究で明らかにされているように、議事堂前広場のイベントは、カナダ人のアイデンティティを強化するための装置となってきた。とくに 1990 年代前半はカナダの一体性を揺るがしかねない出来事が続き、結束 (unity) が強調される機会となった。1990 年のカナダ・デーはミーチ湖協定の不成立が確定した直後であり、臨席したエリザベス女王も結束を訴えた⁽¹⁴⁾。また、1992 年にはフランス語と英語で歌を披露したセリーヌ・ディオーン (Céline Dion, ケベック州) が、カナダにとってのケベック州の重要性とケベック州のカナダ残留を望むメッセージを発し、それは主催者の意向をまさに代弁する内容であったという⁽¹⁵⁾。

2005 年以降の観察にもとづいて改めてカナダ・デーの特徴を検討すると、第一に挙げられるのは徹底した二言語主義である。総督や首相はもちろんのこと、ヌーン・ショーに出席する英国王室関係者も演説に必ずフランス語を取り入れている。ヌーン・ショーは、英語とフランス語を公用語とする国がその首都で開催する国家的行事であり、当然のことではある。しかし、国勢調査によれば、21 世紀に入ってからカナダ全土で英語とフランス語をともに話すことのできる人口は 17% 程度で停滞している。そうしたなかで、オタワのイベントはカナダ人に自らの国が二言語国家であることを再確認させる機会となっている。一方で、ステイタス・クオの原則もおおむね維持されている。すなわち、総督や首相の演説におけるフランス語の割合は、カナダ全土におけるフランス語話者人口の割合よりもやや高めではあるが、いずれの話者からも不満が出にくい程度にとどめられている。

第二の特徴として、第一の点とも関連するが、「建国の二民族」への配慮が挙げられる。印象深かったのは、初代首相ジョン・A・マクドナルド (John A. Macdonald) の生誕 200 周年であった 2015 年のカナダ・デーである。ヌーン・ショーでは、それにちなんだ寸劇が披露されたが、それはマクドナルドが盟友ジョルジュ＝エティエンヌ・カルティエ (George-Étienne Cartier) と語り合う場面であった (写真 2)。もちろん、先行研究では先住民やその他のエスニック集団の文化も取り入れられてきたことが指摘されており⁽¹⁶⁾、「建国の二民族」だけに偏っているわけではない。しかし、この寸劇がケベック州を念頭においた配慮であることは明らかである。

第三に、先行研究でも言及されているが⁽¹⁷⁾、ヌーン・ショーはオリンピック・パラリンピックのメダリストや宇宙飛行士といった、世界的に活躍するカナダ人が紹介される機会でもあり、たとえば、2017 年には新しく宇宙飛行士に選ばれた 2 名が紹介されている。また、ハーパー政権以降の特色として、アフガニスタンをはじめとする国外の PKO に従事する軍人によるビデオ・メッセージが紹介されるようになった。もちろん、これらのメッセージも英語とフランス語の両方で届けられる。

4. 新たな動向—むすびにかえて—

2018年のカナダ・デーでは、新たな動きがみられた。まず、トルドー首相が不在であり、「トマトの首都」として知られるオンタリオ州レムントンから中継で比較的短い演説をおこなうのみであった。オタワを離れた真意は不明であるが、トルドー首相はこの日、レムントンからサスカチュワン州リジャイナへ、さらにユーコン準州ドーソンシティへと移動しており、各地でカナダ・デーのイベントに参加したはずである。なお、カナダ・デー当日に首相がオタワを留守にするのはかつては珍しいことではなかったが、新聞記事で確認する限り、1987年に当時のブライアン・マルルーニー (Brian Mulroney) 首相が市民権授与式の後に創設 50周年を迎えた地元のケベック州ベ・コモへと移動したことが報じられているのが最後である⁽¹⁸⁾。オタワの会場ではトルドー首相に代わってソフィー・グレゴワール・トルドー (Sophie Grégoire Trudeau) 首相夫人が演説したが、この日登壇した他の政府要人はメラニー・ジョリー (Mélanie Joly) 文化継承省大臣(当時)と就任後最初のカナダ・デーを迎えたジュリー・パイエット (Julie Payette) 総督であり、皮肉にも全員がケベック州出身の女性であった。

また、首相や首相夫人がその演説でキーワードのように発した *from coast to coast to coast* というフレーズも注目される⁽¹⁹⁾。日本語にしにくい表現であるが、意識すると「3つの海に囲まれた(国家)」とでもなろう。これまで *from coast to coast* や *from sea to sea* といった表現は、カナダが大陸横断国家であることのとえとしてしばしば用いられてきた⁽²⁰⁾。しかし、夏季の航行が可能になり、北極海がもはや氷に閉ざされた海ではなくなりつつある現在、北極海とその沿岸に関心が寄せられるのは当然であろう。2017年には、連邦結成 150周年のプロジェクトとして、研究者や芸術家、コミュニティ・リーダーらによって、カナダの土地と人々、過去、現在、未来について理解を深めることを目的に、Canada C3 と称する、トロントからセントローレンス川、大西洋、北西航路、さらに太平洋を航行してヴィクトリアに至る 150日間の壮大な旅が実践されている⁽²¹⁾。*from coast to coast to coast* は、今後しばしば目にする表現になりそうである。

本稿では、おもに 2005年以降のオタワにおけるカナダ・デーの特徴を現地観察にもとづいて検討し、さらに新たな動きを紹介した。ケベック州における主権獲得運動の盛り上がりや背景に内容の充実が図られてきたこともあって、これまでのところ、カナダ・デーのイベントでは二言語主義が徹底され、「建国の二民族」も重視されているようにみえる。ただ、2017年のカナダ・デーの直前には連邦結成 150周年を祝うことに対する先住民の抗議行動がおこり、前日の6月30日にトルドー首相が議事堂前広場に設営されたティピ(先住民のテント)を訪れるという一幕があった⁽²²⁾。今後、先住民政策の見直しとともに、「建国の二民族」に先住民も加えた時代がくるかもしれない⁽²³⁾。一方、2018年に政権交代が生じたオンタリオ州やニューブランズウィック州では二言語主義の衰退が危惧され

ており、ケベック州の分離・独立の懸念が薄らいだ現在、連邦レベルでの二言語主義の動向も注視に値しよう。

もとより、この小論ではオタワにおけるカナダ・デーの近年の動向を紹介できたにすぎず、カナダ・デーに着目してカナダのアイデンティティを論じるには、より大きな枠組みにもとづいた分析が求められよう。たとえば、カナダ・デーが現在のように祝われる以前にはオンタリオ州を中心に帝国記念日が重要であったし⁽²⁴⁾、ケベック州においては洗礼者聖ヨハネの日(6月24日)が現在まで重要な祝日であり、アイデンティティを考えるにあたってはこれらも視野に入れた検討が必要である。また、カナダ各地におけるカナダ・デーの祝われ方も注目されるべきだろう⁽²⁵⁾。すなわち、時代と地域によりカナダ・デーのあり方やアイデンティティ形成のプロセスは異なると考えられる。今後の課題としたい。

注

- (1) Matthew Hayday and Raymond B. Blake, "Introduction: Nationalism, Identity, and Community in Canada's Holiday," in Matthew Hayday and Raymond B. Blake, eds., *Celebrating Canada Volume 1: Holidays, National Days, and the Crafting of Identities* (Toronto: University of Toronto Press, 2016), 4-5.
- (2) ドミニオン・デーからカナダ・デーへの改称については、以下の文献に詳しい。Raymond B. Blake, "From Dominion Day to Canada Day, 1946-1982," *Asian Journal of Canadian Studies*, 17(2) (2011), 1-31.
- (3) Matthew Hayday, « La francophonie canadienne, le bilinguisme et l'identité canadienne dans les célébrations de la fête du Canada », dans Anne Gilbert, Michel Bock, et Joseph Yvon Thériault, dir., *Entre lieux et mémoire: L'inscription de la francophonie canadienne dans la durée* (Ottawa, Les Presses de l'Université d'Ottawa, 2009), 93-115.
- (4) Matthew Hayday, "Fireworks, Folk-Dancing, and Fostering a National Identity: The Politics of Canada Day," *Canadian Historical Review*, 91(2) (June 2010), 287-314. Matthew Hayday, "Canada's Day: Inventing a Tradition, Defining a Culture," in Matthew Hayday and Raymond B. Blake, eds., *Celebrating Canada Volume 1: Holidays, National Days, and the Crafting of Identities* (Toronto: University of Toronto Press, 2016), 274-305.
- (5) Hayday, "Canada's Day," 299.
- (6) 筆者は、2005年、2007年、2011年、2013年、2015年から2018年までの8回にわたり、オタワの連邦議会議事堂前広場におけるヌーン・ショーを観察した。
- (7) Government of Canada, "History of Canada Day," 29 January 2019, <<https://www.canada.ca/en/canadian-heritage/services/canada-day-history.html>>.
- (8) Hayday, "Fireworks, Folk-Dancing," 289, 302.
- (9) 1927年の連邦結成60周年記念行事の様子は次の文献が詳述している。Robert Cupido, "Appropriating the Past: Pageants, Politics, and the Diamond Jubilee of Confederation," *Journal of the Canadian Historical Association*, 9 (1998), 155-186.

- (10) この時期はメディアの関心も高いとはいえ、たとえば1969年7月2日(カナダ・デーの翌日)の *The Globe and Mail* の1面を飾るのは、日本の「立太子の礼」にあたる儀式に臨むチャールズ皇太子とエリザベス女王の写真であった。 *The Globe and Mail*, 2 July 1969.
- (11) Hayday, “Canada’s Day,” 298.
- (12) エリザベス女王が臨席した2010年のカナダ・デーには、ミカエル・ジャン (Michaëlle Jean) 総督の姿はなかった。彼女は上海国際博覧会の視察を中心とする中国訪問のために欠席した。たとえば、以下の資料を参照。CBC, “Queen calls Canada ‘example to the world’: Mounties lead her to Parliament Hill for Canada Day festivities,” 29 January 2019, <<https://www.cbc.ca/news/canada/queen-calls-canada-example-to-the-world-1.877582>>.
- (13) 文化継承省は、公用語マイノリティ、すなわちケベック州外のフランス語話者およびケベック州の英語話者に対する支援を管轄する官庁であり、大臣も二言語話者が任命されることが多い。
- (14) *The Ottawa Citizen*, 2 July 1990.
- (15) Hayday, « La francophonie canadienne », 109. Hayday, “Fireworks, Folk-Dancing,” 310. なお、ディオンはオタワではなく、スペイン・セヴィリアで開催中の万国博覧会会場から衛星中継で参加している。 *The Globe and Mail*, 2 July 1992.
- (16) Hayday, “Fireworks, Folk-Dancing,” 297, 310.
- (17) *Ibid.*, 309.
- (18) *The Ottawa Citizen*, 2 July 1987.
- (19) Justin Trudeau, “Canada Day Address” (speech, Ottawa, via satellite from Leamington, ON, 1 July 2018); Sophie Grégoire Trudeau, “Canada Day Address” (speech, Ottawa, 1 July 2018).
- (20) たとえば、カナダ歴史博物館に2017年に新たに開設された The Canadian History Hall の図録では、連邦結成直後におけるカナダの西部への拡大を扱った章のタイトルに from sea to sea というフレーズが用いられている。Chantal Amyot, Lisa Leblanc, and David Morrison eds., *Stories of Canada: The Canadian Story Hall* (Gatineau, QC: Canadian Museum of History, 2017), 125-140.
- (21) Canada C3, “About Canada C3,” 29 January 2019, <<https://canadac3.ca/en/about/>>.
- (22) *The Ottawa Citizen*, 1 July 2017.
- (23) 本稿では十分にふれられなかったが、議事堂前広場におけるカナダ・デーのイベントと先住民のかかわりにも変化がみられる。たとえば、2018年のヌーン・ショーでは、要人のなかで最初に演説したジョリー文化継承省大臣が、その冒頭で議事堂前広場がかつてアルゴンキン族の活動領域であったことにふれ、イベント実施への理解に謝意を表明している。なお、寄宿舎学校問題をはじめ、最近のカナダでは先住民の歴史を見直す動きが顕著であるが、こうした動きを正確に理解するには、断片的な見聞ではなくカナダの先住民に関する全体像を把握しておく必要がある。Mélanie Joly, “Canada Day Address” (speech, Ottawa, 1 July 2018).
- (24) 帝国記念日については日本でもすでに細川道久によって詳細に検討されている。また、祝日に着目してアイデンティティ形成を論じた研究書の編者のひとりであり、1960年代にニューファンドランド・ラブラドル州の非都市地域で育ったレイモンド・B・ブレイク (Raymond B. Blake) は、帝国記念日が強く記憶に残っているという。

細川道久『カナダ・ナショナリズムとイギリス帝国』刀水書房、2007年。Hayday and Blake, “Introduction,” 3-4.

- (25) たとえば、ニューファンドランドにおいて7月1日は第一次世界大戦で多くの犠牲者を出したボモン・アメル（Bellefleur）の戦い（1916年）の慰霊の日でもある。また、マニトバ州以西の州は連邦結成時点でカナダに加わっておらず、住民構成という点でオンタリオ州以东の州と異なる特徴があることにも注意が必要だろう。



写真1:2011年のカナダ・デーに臨席したケンブリッジ公妃。
左に写っている女性はジョンストン総督夫人(2011年7月1日、筆者撮影)



写真2:語り合うマクドナルド(右)とカルティエ(カナダ・デーにおける寸劇の一場面)
(2015年7月1日、筆者撮影)

(おおいしたろう 関西学院大学)